

新年史発行と史料室の今後に向けて

溝 口 薫

本学院は来る2025年に創立150周年を迎える。飯院長を議長とする年史編集委員会は、毎年、その記念の年史発行のため検討を重ね、去る11月の会議では、いよいよこの新企画のための準備体制の決定に至った。いうまでもなく、本学院の重要史料の公開・整備を毎年積み上げて来た図書館史料室が、その運営事務と基礎準備にあたる。竹中園子大学図書館課長を統括として、史料室職員佐伯裕加恵氏、元図書館課長の石村真紀氏、そしてアルバイト職員の富岡ひとみ氏という強力な布陣である。今後、順次その準備にあたっていただく。

振り返れば、本学院は1976年に『神戸女学院百年史 総説』を、そして少し遅れて1981年に『神戸女学院百年史 各論』をと、二部構成になる浩瀚な創立100周年記念年史を発刊している。その際、準備の一環として1972年に史料室が設置され、またその機関誌として本誌『学院史料』が1983年に創刊された。日本における近代女子教育の草分けとして本学が豊かに保存していた史料を、続く未来100年のために整備していくことを願ったのであったことは、本機関誌創刊号に詳しく述べられているとおりである。

さて創立150周年を記念して新しく編まれる次の年史は、本学創立100年以降150周年まで、すなわち1975年から2025年という最近50年を対象とする予定である。その意味は本学の年史編集の歴史において、特に大きな意義をもつことを強調しておきたい。一つには、創立100年以降の史料はいまだ本格的に整備されてはこなかったため、この期間の史料を編集し一つの歴史を編むのは今回が初めての試みとなることである。またこの期間は、周知のように、本学がそれまでになく大きく発展し、かつ、1995年の阪神淡路大震災を経るなど、あら

たな困難にも直面した時期である。さらにその後は日本全体が少子化の影響を受け始め、また、世界においても、地球規模の環境の変化やITの普及による情報社会化、ならびにグローバル化による大きな変化が多重的に起こり、現在進行形でこれまでの世界を一変させつつある。従って、次の年史は、この大きな転換期のさなかにおいて、本学院が新しい時代を迎えるにあたって、なおふさわしい高等教育機関であろうと努め、また必要に応じた教育の発展にいかに取り組んできたか、その記録を歴史として纏める事業となるのである。

本学院は、阪神淡路大震災後においては、その建学の精神の見事な結晶である美しい校舎に大きな被害を被った。しかし、その後、本学院に関わる幾多の方のご尽力、ご協力によって、さらには、文化庁の支援もいただき、再度、その姿を未来へと保持する幸いを得た。その器が多くの人の手により保たれていくように、そのなかで営まれている本学院の全人格的教育の営みもまた、今後、どのような変化の波のなかにおいても、確かな灯火である建学の精神を支えに、これからの未来を拓いていくであろう。過去は過去にのみとどまるのではなく、現在において、繰り返し振り返られるたびに未来を拓く罪ともなる。本学院が豊かな歴史を持っていることのさらに豊かな意味を、来る年史編集を通して確認していくことができたと願っている。

最後になったが、今一点、史料室の未来にも触れておきたい。というのは、本学の史料は、今、世界から必要とされているといっても過言ではないからである。例えば、Noriko Kawamura Ishii氏によるRoutledgeから2004年に刊行された*American Missionary Women at Kobe College, 1873-1909*である。この著作はジョージワシントン大学に提出された博士論文が元になっているが、明治初期に来日した米国の女性宣教師たちが神戸ホームにおいて展開した女子教育、またその支柱となったキリスト教精神、そして自由平等の精神が、当時の女子学生たちにいかなる影響を与えたかを探った歴史研究である。19世紀におけるアメリカ女子教育の発展は、当時の先進国イギリスに先んじて急速であったが、その歴史は今、色々な観点からさらに掘り下げられつつある。また、特に当時のアメリカ女性の公的活動の先鞭を付けた宣教師たちの活躍についても、

単にアメリカ史やフェミニズム研究のみならず、異文化の壁を越える相互理解研究としても注目されているのである。さて、嬉しいことに Ishii 氏は、その著作の謝辞において、当時の大学図書館に勤務されていた奥祥子、阪上澄子両氏の史料に関する「プロフェッショナルな助力に」特段の感謝を述べられているが、これは、今後の本学院、史料室のあり方を暗示するものといえまいか。飯院長は、本誌前号の巻頭言において、史料室を「アーカイブズセンター」へと発展させたいという願いを表明しておられるが、それは、まことに時宜を得たビジョンであるといえよう。本学院にある種々の史料の公開や整備、充実をより本格的な形で考えていくことは、150周年を迎えようという豊かな歴史的遺産を持つ本学院の、世界に対する新時代のミッションの一つといえるからである。

(大学図書館(史料室)長)